

使用上の注意改訂のお知らせ

平成23年1月 (No.22-11)

株式会社 三和化学研究所

合成副腎皮質ホルモン剤

●処方せん医薬品

プレドニゾン錠5mg「三和」

PREDNISOLON

(日本薬局方プレドニゾン錠)

この度、標記製品の「使用上の注意」を一部改訂致しましたので、お知らせ申し上げます。つきましては改訂箇所を一覧に致しましたので、今後のご使用に際しましては、下記内容をご参照くださいますようお願い申し上げます。

今後とも弊社製品のご使用にあたって副作用・感染症等をご経験の際には、弊社MRまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。

1. 改訂内容(下線部: 自主改訂)

改 訂 後		改 訂 前									
4. 副作用 (2)その他の副作用 次の症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には適切な処置を行うこと。		4. 副作用 (2)その他の副作用 次の症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には適切な処置を行うこと。									
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 10%;">頻度 種類</th> <th style="width: 90%;">頻度不明</th> </tr> <tr> <td>消化器</td> <td>下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲亢進、<u>腸管囊胞様気腫症</u></td> </tr> <tr> <td>呼吸器</td> <td><u>縦隔気腫</u></td> </tr> </table>	頻度 種類	頻度不明	消化器	下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲亢進、 <u>腸管囊胞様気腫症</u>	呼吸器	<u>縦隔気腫</u>	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 10%;">頻度 種類</th> <th style="width: 90%;">頻度不明</th> </tr> <tr> <td>消化器</td> <td>下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲亢進</td> </tr> </table>	頻度 種類	頻度不明	消化器	下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲亢進
頻度 種類	頻度不明										
消化器	下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲亢進、 <u>腸管囊胞様気腫症</u>										
呼吸器	<u>縦隔気腫</u>										
頻度 種類	頻度不明										
消化器	下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲亢進										
9. その他の注意 副腎皮質ホルモン剤を投与中の患者にワクチン(種痘等)を接種して神経障害、抗体反応の欠如が起きたとの報告がある。 <p style="text-align: center;">記載削除</p>		9. その他の注意 (1)副腎皮質ホルモン剤を投与中の患者にワクチン(種痘等)を接種して神経障害、抗体反応の欠如が起きたとの報告がある。 (2)本剤投与中に、腸管囊胞様気腫症、縦隔気腫が発現したとの報告がある。									

2. 改訂理由

従来から、[その他の注意]の項に「本剤投与中に、腸管囊胞様気腫症、縦隔気腫が発現したとの報告がある」旨を記載しておりましたが、プレドニゾン製剤の企業報告に基づき、[副作用]の[その他の副作用]の項に「腸管囊胞様気腫症」、「縦隔気腫」を記載しました。これに伴い、[その他の注意]の項の記載を削除しました。

医薬品添付文書改訂情報は機構のインターネット情報提供ホームページ(<http://www.info.pmda.go.jp/>)に最新添付文書並びに医薬品安全対策情報(DSU)が掲載されます。あわせてご利用ください。

〔プレドニゾン錠5mg「三和」の改訂後の使用上の注意〕(全文)

(下線 部:今回改訂箇所)

■禁忌(次の患者には投与しないこと)■

本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

■原則禁忌(次の患者には投与しないことを原則とするが、特に必要とする場合には慎重に投与すること)■

- 1.有効な抗菌剤の存在しない感染症、全身の真菌症の患者[免疫機能抑制作用により、症状が増悪することがある。]
- 2.消化性潰瘍の患者[肉芽組織増殖抑制作用により、潰瘍治癒(組織修復)が障害されることがある。]
- 3.精神病の患者[大脳辺縁系の神経伝達物質に影響を与え、症状が増悪することがある。]
- 4.結核性疾患の患者[免疫機能抑制作用により、症状が増悪することがある。]
- 5.単純疱疹性角膜炎の患者[免疫機能抑制作用により、症状が増悪することがある。]
- 6.後囊白内障の患者[症状が増悪することがある。]
- 7.緑内障の患者[眼圧の亢進により、緑内障が増悪することがある。]
- 8.高血圧症の患者[電解質代謝作用により、高血圧症が増悪することがある。]
- 9.電解質異常のある患者[電解質代謝作用により、電解質異常が増悪することがある。]
- 10.血栓症の患者[血液凝固促進作用により、症状が増悪することがある。]
- 11.最近行った内臓の手術創のある患者[創傷治癒(組織修復)が障害されることがある。]
- 12.急性心筋梗塞を起こした患者[心破裂を起こしたとの報告がある。]

■使用上の注意■

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

- (1)感染症の患者[免疫機能抑制作用により、感染症が増悪するおそれがある。]
- (2)糖尿病の患者[糖新生作用等により血糖が上昇し、糖尿病が増悪するおそれがある。]
- (3)骨粗鬆症の患者[蛋白異化作用等により、骨粗鬆症が増悪するおそれがある。]
- (4)腎不全の患者[薬物の排泄が遅延するため、体内蓄積による副作用があらわれるおそれがある。]
- (5)甲状腺機能低下のある患者[血中からの半減時間が長くなるとの報告があり、副作用があらわれるおそれがある。]
- (6)肝硬変の患者[代謝酵素活性の低下等により、副作用があらわれやすい。]
- (7)脂肪肝の患者[脂肪分解・再分布作用により、肝臓への脂肪沈着を増大させ、脂肪肝が増悪するおそれがある。]
- (8)脂肪塞栓症の患者[大量投与により、脂肪塞栓症が起こるとの報告があり、症状が増悪するおそれがある。]
- (9)重症筋無力症の患者[蛋白異化作用により、使用当初、一時症状が増悪するおそれがある。]
- (10)高齢者[「高齢者への投与」の項参照]

2. 重要な基本的注意

- (1)本剤の投与により、**誘発感染症、続発性副腎皮質機能不全、消化管潰瘍、糖尿病、精神障害等の重篤な副作用**があらわれることがあるので、本剤の投与にあたっては次の注意が必要である。
 - 1)投与に際しては、特に適応、症状を考慮し、他の治療法によって十分に治療効果が期待できる場合には、本剤を投与しないこと。また、局所的投与で十分な場合には、局所療法を行うこと。
 - 2)投与中は副作用の出現に対し、常に十分な配慮と観察を行い、また、患者をストレスから避けるようにし、事故、手術等の場合には増量するなど適切な処置を行うこと。
 - 3)特に、本剤投与中に**水痘又は麻疹に感染すると、致命的な経過をたどることがある**ので、次の注意が必要である。
 - a)本剤投与前に水痘又は麻疹の既往や予防接種の有無を確認すること。
 - b)水痘又は麻疹の既往のない患者においては、水痘又は麻疹への感染を極力防ぐよう常に十分な配慮と観察を行うこと。感染が疑われる場合や感染した場合には、直ちに受診するよう指導し、適切な処置を講ずること。
 - c)水痘又は麻疹の既往や予防接種を受けたことがある患者であっても、本剤投与中は、水痘又は麻疹を発症する可能性があるため留意すること。
 - 4)**連用後、投与を急に中止すると、ときに発熱、頭痛、食欲不振、脱力感、筋肉痛、関節痛、ショック等の離脱症状があらわれることがある**ので、投与を中止する場合には、徐々に減量するなど慎重に行うこと。離脱症状があらわれた場合には、直ちに再投与又は増量すること。
- (2)本剤の長期あるいは大量投与中の患者、又は投与中止後6カ月以内の患者では、免疫機能が低下していることがあり、生ワクチンの接種により、ワクチン由来の感染を増強又は持続させるおそれがあるため、これらの患者には生ワクチンを接種しないこと。

3. 相互作用

併用注意(併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
バルビツール酸誘導体 フェノバルビタール フェニトイン リファンピシン	本剤の作用が减弱することが報告されているので、併用する場合には用量に注意すること。	バルビツール酸誘導体、フェニトイン、リファンピシンはチトクロームP-450を誘導し、本剤の代謝が促進される。
サリチル酸誘導体 アスピリン アスピリンダイアルミニウム サザピリン等	併用時に本剤を減量すると、サリチル酸中毒を起こすことが報告されているので、併用する場合には用量に注意すること。	本剤はサリチル酸誘導体の腎排泄と肝代謝を促進し、血清中のサリチル酸誘導体の濃度が低下する。
抗凝血剤 ワルファリンカリウム	抗凝血剤の作用を减弱させることが報告されているので、併用する場合には用量に注意すること。	本剤は血液凝固促進作用がある。
経口糖尿病用剤 ブホルミン塩酸塩 クロルプロパミド アセトヘキサミド等 インスリン製剤	経口糖尿病用剤、インスリン製剤の効果を减弱させることが報告されているので、併用する場合には用量に注意すること。	本剤は肝臓での糖新生を促進し、末梢組織での糖利用を抑制する。

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
利尿剤(カリウム保持性利尿剤を除く) フロセミド アセタゾラミド トリクロルメチアジド等	低カリウム血症があらわれることがあるので、併用する場合には用量に注意すること。	本剤は尿細管でのカリウム排泄促進作用がある。
活性型ビタミンD ₃ 製剤 アルファカルシドール等	高カルシウム尿症、尿路結石があらわれることがあるので、併用する場合には、定期的に検査を行うなど観察を十分に行うこと。また、用量に注意すること。	機序は不明。 本剤は尿細管でのカルシウムの再吸収阻害、骨吸収促進等により、また、活性型ビタミンD ₃ 製剤は腸管からのカルシウム吸収促進により尿中へのカルシウムの排泄を増加させる。
シクロスポリン	他の副腎皮質ホルモン剤の大量投与で、シクロスポリンの血中濃度が上昇するとの報告があるので、併用する場合には用量に注意すること。	副腎皮質ホルモン剤はシクロスポリンの代謝を抑制する。
エリスロマイシン	本剤の作用が増強されるとの報告があるので、併用する場合には用量に注意すること。	本剤の代謝が抑制される。
非脱分極性筋弛緩剤 バンクロニウム臭化物 ベクロニウム臭化物	筋弛緩作用が減弱又は増強するとの報告があるので、併用する場合には用量に注意すること。	機序は不明。

4. 副作用

(1)重大な副作用

次の症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には適切な処置を行うこと。

- 1)誘発感染症、感染症の増悪
- 2)続発性副腎皮質機能不全、糖尿病
- 3)消化管潰瘍、消化管穿孔、消化管出血：消化管潰瘍、消化管穿孔、消化管出血があらわれるとの報告があるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。
- 4)肺炎
- 5)精神変調、うつ状態、痙攣
- 6)骨粗鬆症、大腿骨及び上腕骨等の骨頭無菌性壊死、ミオパチー
- 7)緑内障、後囊白内障、中心性漿液性網脈絡膜症、多発性後極部網膜色素上皮症：連用により眼圧上昇、緑内障、後囊白内障(症状：眼のかすみ)、中心性漿液性網脈絡膜症・多発性後極部網膜色素上皮症(症状：視力の低下、ものがゆがんで見えたり小さく見えたり、視野の中心がゆがんで見えにくくなる。中心性漿液性網脈絡膜症では限局性の網膜剥離がみられ、進行すると広範な網膜剥離を生じる多発性後極部網膜色素上皮症となる。)を来すことがあるので、定期的に検査をすることが望ましい。
- 8)血栓症：血栓症があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。
- 9)心筋梗塞、脳梗塞、動脈瘤：心筋梗塞、脳梗塞、動脈瘤があらわれることがあるので、長期投与を行う場合には、観察を十分に行うこと。
- 10)硬膜外脂肪腫：硬膜外脂肪腫があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には減量するなど、適切な処置を行うこと。
- 11)腱断裂：アキレス腱等の腱断裂があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には減量するなど適切な処置を行うこと。

(2)その他の副作用

次の症状があらわれることがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には適切な処置を行うこと。

種類	頻度	頻度不明
過敏症 ^{注1)}		発疹
内分泌		月経異常、クッシング症候群様症状
消化器		下痢、悪心・嘔吐、胃痛、胸やけ、腹部膨満感、口渇、食欲不振、食欲亢進、腸管嚢胞様気腫症
呼吸器		縦隔気腫
精神神経系		多幸症、不眠、頭痛、めまい
筋・骨格		筋肉痛、関節痛
脂質・蛋白質代謝		満月様顔貌、野牛肩、窒素負平衡、脂肪肝
体液・電解質		浮腫、血圧上昇、低カリウム性アルカローシス
眼		網膜障害、眼球突出
血液		白血球増多
皮膚		痤瘡、多毛、脱毛、色素沈着、皮下溢血、紫斑、線条、痒痒、発汗異常、顔面紅斑、脂肪織炎
その他		発熱、疲労感、ステロイド腎症、体重増加、精子数及びその運動性の増減、尿路結石、創傷治癒障害、皮膚・結合組織の菲薄化・脆弱化

注1) 症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

5. 高齢者への注意

高齢者に長期投与した場合、感染症の誘発、糖尿病、骨粗鬆症、高血圧症、後囊白内障、緑内障等の副作用があらわれやすいので、慎重に投与すること。

6. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

- (1)妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、治療上の有益性が危険性を上回ると判断される場合にのみ投与すること。〔動物試験(ラット、マウス、ウサギ、ハムスター)で催奇形作用が報告されており、また、新生児に副腎不全を起こすことがある。〕
- (2)授乳中の婦人には本剤投与中は授乳を避けさせること。〔母乳中へ移行することがある。〕

7. 小児等への投与

- (1)低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児の発育抑制があらわれることがあるので、観察を十分に行うこと。
- (2)頭蓋内圧亢進症状や高血圧性脳症があらわれることがある。

8. 適用上の注意

薬剤交付時：PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。(PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、更には穿孔をおこして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている)

9. その他の注意

副腎皮質ホルモン剤を投与中の患者にワクチン(種痘等)を接種して神経障害、抗体反応の欠如が起きたとの報告がある。

